［論　文］

老年者を理解するための疑似体験

－INTO AGINGによるシミュレーションゲームを試みて－

嶋田えみ子* 流石ゆり子* 渡邊裕子* 窪川理英*

Trial Experience Aimed at Understanding Elderly People

Simada Emiko　Sasuga Yuriko　Watanabe Yuuko　Kubokawa Rie

（1996年10月28日受付）

ABSTRACT

It is important yet difficult for those who study nursing to understand people as a subject of nursing. It is still more difficult for young students to do so. Therefore, to facilitate students understanding of elderly people by, it would be useful to experience the various changes that may occur during the geriatric period. the Following are what the students realized, for ther more, through their experiences and my analysis, an examination of the image they acquired about elderly people was conduted

1) By experiencing an environment where they were independent even with physical handicap, they gained an understandung of learned physical pain.
2) By experiencing mental and social occurrences in an environment where they were independent, they learned "about acquiring certain things when they get old" and many students develeped a positive image.
3) By experiencing an environment where they are almost not independent because of physical handicap, they learned about mental pain, physical pain and physical handicaps.
4) By experiencing mental and physical occurrences in an enviroment where they are not independent, they could imagine how elderly people feel in all experiences.

Keywords : Image of elderly people. Simulation game

*本学 老人看護学

【抄録】
看護を学ぶものとして、看護の対象を理解することは重要なことであり、また困難なことでもある。ましてや青年期の学生が看護の対象としての老年者を理解するのは至難の業である。そこで老年期に起こる様々な変化を疑似体験することにより、学生の老年者理解に結びつくのではないかと考えた。
体験学習終了後のレポートから、体験を通して実感したことおよび考えたことを抽出し、学生が老年者をどのようにイメージできたかを分析検討した。
その結果、①自立できている身体障害の体験では「身体的苦痛」が老年者を最も多くイメージできた。②自立した生活の中で起きた心理・社会的出来事の体験では、「老年者になって獲得する」は最も多く老年者をイメージでき肯定的な回答が多かった。③自立できなくなるような身体的障害出来事の体験では、「精神的苦痛」の排泄に関する出来事と「身体的苦痛」「身体的不自由」が老年者をイメージできた。④自立できなくなるような生活の中で起きた心理・社会的出来事では、すべての体験で老年者をイメージすることができたことを確認した。

Ⅰ　はじめに

看護を学ぶものとして、看護の対象を理解することは重要なことであり、また困難なことでもある。ましてや青年期の学生が看護の対象としての老年者を理解するのは至難の業である。早坂は『人間が人間を理解するとは、何よりも、相手の人間と体験時間を共有すること』[1]と述べている。しかし、核家族化がすすむ今日に育った学生は、老年者と接する機会すら恵まれていない状況である。そんな彼らには、老年者を理解できるような学習を取り入れ、老年者の生活を知ることが必要である。
高崎は『我々は、相手の身体の痛みや悩みを理論的に理解するよりも先に、それを私のものとして共感し、共有できた時、真の援助行為が成り立つことを経験的に知っている』[2]と述べている。そこで知識から老年者を理解しようとするのではなく、『客体でありながら主体でもあるといった身体の両義性に注目する』[3]ことを手がかりにし、老年者の生活を疑似体験する方法で学べないかと考えた。老年者がどのような体験をしているのかを知るだけでなく、人生の一線上にある自分自身の老いをイメージできるような体験を提供しなければならない。
老年者の体験学習（INTO　AGING）は、佐藤らの研究[13),14)]によりその効果が報告されている。そこで、本学の学生の状況に合わせた内容で作成したシミュレーションが、学生の老年者理解につなげられたことを確認できたので報告する。

Ⅱ　研究目的

老年者のシミュレーションゲームにより、老年者をどのようにイメージしたかを明らかにする。

Ⅲ　概念枠組

学生が老年者を理解するまでの経過を以下のように考える。
人は、今までの生活において得た老年者への知識を基に、その人なりの老年者イメージを描いている。生活年齢や既存の知識量も少ない学生においては、そのイメージを描くのが困難な状況である。そこで老年者の生活をシュミレートすることにより、身体を通した体験によって老年者の実像に近いイメージを描けるようにする。その後の講義や実習により、更に老年者イメージを実像に近づけ老年者の理解につなげる。
【用語の定義】
・老年者イメージ

老年者と接したり、老年者の社会生活・精神活動・身体的機能の特徴を学んだことにより、その人が、老年者はこのようなものだろうと捉えた内容をいう。

・シミュレーションゲーム

老年者の生活で起こり得る状況を設定し、参加者が偶然に出会う出来事を疑似体験する。

V　研究方法

1，対象

“INTO AGING”を行った本学2年生　137名

2，分析方法

体験学習終了後の学生のレポートから、体験を通して、実感したことおよび考えたことを抽出し、回答内容をそれぞれの体験で共通する項目に分類し、学生が老年者をどのようにイメージできたかを分析検討。回答は複数回答。

3，本学で実施した“INTO AGING”の概略

このシミュレーションゲームは、老年期に起こる身体・心理・社会的出来事を体験することで、自己の老い観を認識し老人看護の援助を考える機会とすることを目的とする。

まず、ゲームの事前準備として、自己イメージづくりを行う。老年期に自分が何歳まで生きていたいかを考えた年齢から5歳引いた時の自分をイメージし、名札カード（その時に呼ばれていたい名前）1枚・住居カード（住みたい場所と住居形態）1枚・仕事カード（行なっていたい仕事）1枚・持ち物カード（持っていたいもの）3枚・自己イメージカード5枚の合計11枚のカード（以下自己カードという）を作成し、この5年間に起こりうる出来事を体験してゆく。

ゲームは1グループ6～7人で2グループがペアとなり、体験者とアシスタントを交互に経験する。体験者は、自己カードを持ち、用意された老年期に起こりうる出来事の書かれた4種類のカード（以下出来事カードという）をAからDまで順番に1枚ずつ引いてゆき、全員が4つの出来事を体験する。作成した出来事カードは以下の通りである。カードに書かれてある内容と指示に従って、身体に疑似体験用具をつけたり、自己カードを捨てたりしながらゴールに向かって進んでいく。体験時間は25分で、全員の体験が終了した直後に10分程度の全体討議を行う。

Aカード；自立できている身体障害9枚（表1参照）

Bカード；自立した中で起きる心理的・社会的出来事9枚（表2参照）

Cカード；自立できなくなるような身体障害7枚（表3参照）

Dカード；自立できなくなるような心理的・社会的出来事7枚（表4参照）

Ⅵ　結果

(1)　自立できている身体障害のシミュレーション

自立のできる身体障害に遭遇する出来事を以下の3種類に分類した。

『身体的苦痛を伴う体験』

「腰が曲がる」「足腰が重い」「足の関節が痛い」

『身体的不自由さを実感する体験』

「上手く話せない」「視力低下」「手の感覚が鈍い」「耳が遠い」

『身体の外観が不快になるような体験』

「顔にしみ」「顔にしわ」

自立できている身体的障害の出来事で最も多く回答しているのは、「腰が曲がる」「上手く話せない」「足腰が重い」の15回答であった。

表1の通り、この中で最も多く実感しているのは『身体的苦痛』の＜腰を曲げて痛い＞と、『身体的不自由』の＜言葉がはっきりせずもどかしい＞、『身体の外観が不快』の＜顔のしみが恥ずかしい＞のそれぞれ8回答であった。最も多い実感は『身体的苦痛』『身体的不自由』『身体の外観が不快』とも同数回答であった。次いで『身体的苦痛』の＜腰が重い＞の5回答、

表１　自立のできる身体障害に遭遇する出来事

出来事カード		実感したこと		考えたこと		
		回答数	最も多かった実感	回答数	老年者をイメージ	その他
苦痛	腰を45度に曲げる	15	腰が痛い(8)	8	6	看護援助
	砂嚢をつけて足腰が重い	15	膝が重い(5)	6	6	
	膝に包帯を巻き膝関節痛	6		6	4	自分の人生観
不自由	綿球を入れて上手く話せない	15	もどかしい(8)	3	3	
	サングラスで視野が狭い	12	ぶつかりそう(2)	7	3	現在の自分の不自由
	手袋をつけ手の感覚が鈍い	9	細かな作業できず(3)	4	4	
	耳栓で難聴	9	さびしい(4)	1	1	
不快	顔にしみシール	9	恥ずかしい(8)	6	2	現在に焦点
	顔にしわシール	6	笑われた(3)	5	2	自分の将来像

＊回答数は複数回答

３番目が『身体的不自由』の＜耳が遠くて淋しい＞の４回答であった。

体験から考えた事の中で、老年者をイメージしたものの最も多かったのは、『身体的苦痛』の「腰が曲がる」と「足腰が重い」であった。

「腰が曲がる」は、８回答のうち６回答が＜杖があれば楽だろう＞＜日常生活も困難だろう＞＜老人は疲れるだろう＞等の老年者をイメージし「足腰が重い」の６回答全てが＜これでは遠くに行きたくない＞＜老人は体力の消耗が早いだろう＞＜こんなに足が重いなら、老人の動きが遅いのがわかる＞等、老年者をイメージした内容であった。

『身体的不自由』の「視野狭い」は６回答のうち３回答が老年者をイメージしたもので、＜老人もこんな感じ＞＜老眼鏡で歳取った自分に気付かされた＞＜日常生活が出来ないのはショック＞等で、他は＜目が見えないのは、自分にとって一番嫌なこと＞＜新聞のスクラップが出来ない＞＜車の運転が出来ない＞等、現在の自分にとって不自由だという考え方をしている。また『身体の外観が不快』の「顔にしみ」では、実感として＜恥ずかしい＞が８回答と非常に多かったが、体験から考えた老年者のイメージは少なく、＜内向的になる＞＜新しい自己概念を受け入れるのは大変＞と２回答だけで、他は＜しみで心は変わらない＞＜自分の老化現象を受け入れた＞＜受け入れて発達課題を達成した＞等、現在の自分に焦点を当てた抽象的な考え方をしているもののほうが多かった。

『身体的不自由』の「手の感覚が鈍い」は４回答で＜老後の難しさを感じた＞＜細かな作業が出来ず不安＞等で同じく『身体的不自由』の「上手く話せない」は３回答で＜自分のからだが思うようにならないのを受け入れるのは大変な努力がいる＞など回答数は少ないが、体験から考えたことは、両者とも全て老年者をイメージした内容であった。

以上から、『身体的苦痛』の「腰が曲がる」「足腰が重い」「足の関節が痛い」の出来事は、身体障害の体験を最も強く受け、また体験から考えたことも殆ど老年者をイメージしている。『身体の外観が不快』の「顔にしわ」・「顔にしみ」や『身体的不自由』の「視野狭い」は＜恥ずかしい＞や＜暗くてぶつかりそう＞等の実感は強く受けているが、現在の自分に焦点を当てたものや、老人の大変さや辛さのイメージにまでは考えが及んでいないものが多い。

『身体的不自由』の「耳が遠い」も＜人との距離が遠くなって淋しい＞等の実感は強いが体験から考えた回答数は１回答で最も少なかった。

自立できている身体障害での出来事に遭遇し

て実感した事は『身体的苦痛』『身体的不自由』『身体の外観が不快』に差がない回答数だったが、体験から考えたことでは、『身体的苦痛』の体験が最も老年者をイメージする回答が多く、『身体の外観が不快』は、老年者をイメージする迄にいたっていないもののほうが多かった。また、『身体的不自由』は、考えられたことの回答数は多くなかったが、内容としては老年者をイメージしているものが殆どであった。

(2) 自立した生活の中に起きる心理・社会的出来事のシミュレーション

自立した生活の中で起きる心理・社会的出来事を以下の4つに分類した。

『老年者になって獲得する』

「老人クラブの役員」「シルバーチケット」「電車で席を譲ってくれた」

『老年者になって制限される』

「献血を断られた」「車の免許が更新されない」

『年齢を感じる』

「仲良しの友人が死亡」「公衆電話のかけ方」

『年齢を感じさせられる』

「お婆さんと呼び止められる」「のろいと追い越される」

表2の通り、この体験から最も多く実感しているのは、『年齢を感じる』の<仲良しの友人が死亡してとても悲しい>と『老年者になって獲得する』の<電車で席を譲ってもらってうれしい>のそれぞれ4回答であった。次いで『年齢を感じさせられる』の<お婆さんと呼ばれ、自分では若いと思っていたのにショック><のろいと追い越され嫌な気分>が各3回答であった。

いずれの場合も、<悲しい、ショック、いやな気分>などの回答が多かったが、「仲良しの友人が死亡」では17回答中16、『老年者になって制限される』の「献血を断られた」は9回答のすべてが悲観的な実感であった。一方、「老人クラブの役員」「電車で席を譲ってくれた」「シルバーチケット」では<うれしい>と肯定的な回答をしたものが多かったが、いずれも『老年者になって獲得する』の体験であった。この体験から考えたことの回答が最も多かったのは、「老人クラブの役員」と「献血を断られた」および「公衆電話のかけ方がわからない」の各10回答であった。次に多かったのは「のろいと追い越された」で9回答、最も少なかったのは、「仲良しの友人が死亡」の6回答であっ

表2　自立した中で起きる心理的・社会的出来事

出来事カード		実感したこと		考えたこと				
		回答数	最も多い実感	回答数	老人をイメージ		肯定	否定
					看護	その他		
獲得	老人クラブの役員になる	10	うれしい(2)　面倒(2)	10	4	5	0	1
	シルバーチケットをもらう	10	うれしい(2)　ショック(2)	8	1	4	2	1
	席を譲ってもらった	7	うれしい(4)	8	2	4	1	1
制限	献血を断られた	9	悲しい(2)　がっかり(2)	10	2	5	0	3
	車の免許が更新されない	10	悲しい(2)　ショックなし(2)	7	0	6	0	1
年齢感じる	仲良しの友人死亡	17	悲しい(4)	6	0	4	1	1
	電話のかけかたが解らない	7	悲しい(2)	10	0	7	1	2
感じさせられ	お婆さんと呼ばれる	9	ショック(3)	8	1	6	0	1
	のろいと追い越された	9	嫌な気分(3)	9	0	3	6	0

＊回答数は複数回答

た。

表２の通り、９つすべてのカードで老年者をイメージしていた。老人をイメージしたものが最も多かった「老人クラブの役員」では、＜忙しいと精神的に疲れて余裕がなくなる＞＜年をとるとよいことはひとつもない＞など否定的な回答が５、＜楽しくできればやりがいになる＞＜生活にめり張りを持たせるためにはよいこと＞など肯定的な回答が４と、対照的な考え方がみられた。「公衆電話のかけ方がわからない」では、＜老人はどれほど歯痒い気持ちなのだろう＞など、老年者の心理をイメージしたものが７回答であった。また『老年者になって制限される』の「車の免許が更新されない」では、＜自由がどんどん奪われる＞＜行きたい所に行けなくなる＞など、現在の自分の不自由さから老年者をイメージしていた。

「献血を断られた」では、＜役立たずと言われているようなもので高齢者の心の中には大きく残るだろう＞＜世間から用の無い人間として扱われて生きる意欲も失ってしまうだろう＞等、人間としての存在感や老年者に対する、社会的な価値観にまで目を向けてイメージしていた。

「電車で席を譲ってくれた」と「シルバーチケット」および、『年齢を感じさせられる』の「お婆さんと呼び止められた」のいずれも、＜年齢で制限されるのはある程度仕方がない＞＜60～80歳なら当然＞という共通した内容であった。

老年者をイメージした回答が最も少なかったのは「のろいと追い越された」であったが、＜いい気持ちはしないだろう＞＜身体面に生きがいをもっていたらショックだろう＞など、老年者のつらい気持ちを客観的にイメージしていた。

自立した生活の中で起きた心理的・社会的出来事に遭遇して、実感したことが最も多かったのは『年齢を感じる』と『老年者になって獲得する』であり、肯定的な実感ができたのは『老年者になって獲得する』だけであり、老年者をイメージした回答も最も多かった。『老年者になって獲得する』の「老人クラブの役員」は、実感したことも比較的多くどちらの内容でも、肯定的な回答が含まれていた。また、『年齢を感じさせられる』の「のろいと追い越された」と『年齢を感じる』の「仲良しの友人が死亡」では、老人をイメージする回答が少なかった。特に「仲良しの友人が死亡」は、＜次は自分の番かもしれないという不安や恐怖感＞や＜肉親を亡くすくらい悲しい＞など強い実感を受けているが、老年者をイメージした回答は最も少なかった。

(3)　自立できなくなるような身体的障害のシミュレーション

自立できなくなるような身体的障害での出来事を、以下の３つに分類した。

『自立ができない精神的苦痛』

表３　自立できなくなるなるような身体障害に遭遇する出来事

出来事カード		実感したこと		考えたこと		
		回答数	最も多かった実感	回答数	老年者をイメージ	その他
精神的苦痛	老人性痴呆症でつなぎのパジャマ	26	悲しい(7)	16	0	自己の喪失
	寝かせられて紙オムツつける	29	恥ずかしい(10)	15	6	看護援助
	左半身マヒで便・尿器あてる	19	恥ずかしい(6)	13	2	看護援助
身体的苦痛	右半身マヒで杖歩行	19	辛かった(5)	14	5	対応策
	糖尿病性壊死で片足歩行	13	辛かった(7)	14	5	対応策
身体的不自由	リウマチで肘を曲げての着衣	22	不自由(3)	14	3	対応策
	左大腿骨頚部骨折で車椅子	7	さびしい(3)	16	8	看護援助・社会提案

＊回答数は複数回答

「紙オムツ」「つなぎのパジャマ」「便器・尿器」

『自立ができない身体的苦痛』

「杖歩行」「片足歩行」

『自立できない身体的不自由』

「肘を曲げての着衣」「車椅子」

以上の分類で表3の通り、最も多い実感は『精神的苦痛』の＜寝かせられて紙おむつが恥ずかしい＞の10回答で、次いでやはり『精神的苦痛』の＜つなぎのパジャマで悲しい＞『身体的苦痛』の＜糖尿病で片足切断が辛い＞の7回答、3番目は『精神的苦痛』の＜半身マヒ便器使用で恥ずかしい＞の6回答であった。

具体的実感内容は、＜紙オムツをしている姿を他人に見られるこの上ない恥ずかしさ＞や＜片足でバランスをとるのは辛い＞等どれも体験したことに率直な反応を示した回答であった。

体験から考えたことの中で、老年者をイメージしたものが最も多かったのは、『身体的不自由』の「左大腿骨頚部骨折で車椅子」の8回答であり、実感したことは一番少なかったが＜老人が車椅子を自分で動かせるだろうか＞＜家の中ではさぞ動かしにくいだろう＞＜ますます体力が衰える＞と老年者を考えた内容がみられた。＜この時の看護によって防止できる＞と看護ケアを考えたり、＜実際の社会は段差があり老人にやさしくない＞＜車椅子での活動ができるよう世の中を改善すること＞など社会への提言を考えた回答もあった。

次は『精神的苦痛』の「寝かせられ生活で紙おむつ」の6回答で＜老人だから仕方ないということはない＞＜他人に排泄を頼むのは本当に嫌なものだろう＞など老年者をイメージしていた。やはり＜自立を目指し援助したい＞＜自尊心を傷つけないよう看護する＞など看護ケアを考えていた。『身体的苦痛』の「糖尿病性壊死で片足歩行」は5回答で＜老人が片足で歩くには無理がある＞＜今でさえ辛いのに筋肉が衰えたらもっと大変＞等老年者をイメージしており＜片足がなくても失わない目標を作りたい＞といった障害に対する対応策を考えていた。『身体的苦痛』の「右半身マヒで杖歩行」も5回答で＜老人は体力がないので大変＞＜痴呆が進んでしまう＞と老年者をイメージするが＜リハビリして旅行にゆく＞と自分の対応策を考えていた。『身体的不自由』の「リウマチで肘をまげての着衣」でも老年者のイメージから自分の対応策を考えていた。

『精神的苦痛』の「左半身マヒで便器・尿器あてる」では、老年者のイメージは2回答＜老人にはどれほど辛いことか解った＞＜老人は障害を受けとめなければならない＞と考え、回答数は少ないが＜排泄の援助をするときは配慮が必要＞と看護ケアを考えた回答があった。

老年者のイメージがまったく考えられなかったのは『精神的苦痛』の「老人性痴呆症でつなぎのパジャマ」である。＜悲しくて悲しくて＞＜死んでしまいたい＞等多く実感した回答がみられたが、＜私という存在がなくなった＞＜痴呆には絶対なりたくない＞と現在の自分の喪失を考え、老年者のイメージまでは至っていない。

以上のことから、『精神的苦痛』の「寝かせられ生活で紙オムツ」や「左半身マヒで便器・尿器あてる」といった排泄に関係する出来事は老年者のイメージから看護ケアまで考えられていたが、「老人性痴呆症でつなぎのパジャマ」では、実感のみの回答であった。

『身体的苦痛』の「右半身マヒで杖歩行」「糖尿病性壊死で片足歩行」は、実感として共に＜辛かった＞と回答し、老年者のイメージを考えることができた。

『身体的不自由』の「左大腿骨頚部骨折で車椅子」「リウマチで肘をまげての着衣」両者も老年者のイメージを考えられた。

「車椅子」に関しては実感したことは少なかったにもかかわらず、老年者のイメージから看護ケア、社会的対策などを考える機会となった。

(4) 自立できなくなるような心理・社会的出来事のシミュレーション

自立できなくなるような心理・社会的出来事を以下の３つに分類した。

『生活行動の依存』

「家が全焼」「寝たきりでヘルパー」「ガスを止められる」

『精神的活動を喪失』

「生きる楽しみなし」「物忘れ」

『老人病院・老人ホームに入所』

「配偶者死亡」「誤嚥し肺炎」

自立できなくなるような心理・社会的出来事の体験で最も多い実感は、表４より『老人病院・ホーム入所体験』の「配偶者死亡で老人ホーム入所」の28回答で、次いで「肺炎で老人病院入院」の16回答、『生活行動の依存体験』の「寝たきりでヘルパーに来てもらう」の15回答、『精神的活動の喪失体験』の「物忘れで同じことを繰り返す」の13回答の順であった。

体験により実感した内容にそれ程の差はなく、全体的には＜さびしい、つらい、ショック生きがいを失った、恥ずかしい＞等のように大半が悲しみの感情表現であった。しかし、内容をよくみると、『老人病院・ホーム入所』の「配偶者死亡で老人ホーム入所」の＜ショック＞、「肺炎で老人病院入院」の＜生きる望みを失った＞等、他の出来事に比べ深い悲しみや絶望の実感であった。

次に『生活行動の依存』の「家が全焼し持ち物カードを失う」「寝たきりでヘルパーに来てもらう」「ガスを止められて給食配給を受ける」で、１番多い実感はそれぞれ＜生きがいを失った＞＜さびしい＞などであった。これ以外にも＜ポッカリ穴があいた・友人と健康をなくしショック・生きた屍・ひとりきりは嫌＞等のように悲しみを実感していた。また『精神的活動の喪失』の２つの出来事についてみると、「物忘れで同じことを繰り返す』では＜恥ずかしい、これが一番ショック、死にたい、ゾッとした＞等の回答であり、悲観的な内容が多かった。「生きる楽しみなし」では＜楽しくない＞＜さびしい＞等であった。

体験から考えたことの中で、老年者をイメージしたものが最も多かったのは、『老人病院・ホーム入所』の「配偶者死亡で老人ホーム入所」であった。その内訳をみると、＜夫の死の受容に時間がかかるだろう・夫には絶対自分より後で死んで欲しい＞等、配偶者を失ったさびしさを回答した内容が大半であった。しかし、＜友人と励まし合い生きていく事に自信が持てた・沢山の友人ができ自立し、夫の分まで精一杯生きよう・同年代の友人を作って楽しく生活できる気がする＞等、ホームでの生活にこれからを託す内容も見られた。これと対照的に「肺炎で老人病院入院」は、＜社会から取り残された・自由が奪われた＞＜入りたくない施設・ここで死ぬのは悲しい＞等の暗いイメージであった。

表４　自立できなくなるような心理的・社会的出来事

出来事カード		実感したこと		考えたこと			
		回答数	最も多かった実感	回答数	老人をイメージ	看護	その他
生活行動依存	家が全焼し持ち物カード失う	10	生きがい喪失(10)	13	10	0	3
	寝たきりでヘルパーに来てもらう	15	さびしい(4)	15	15	0	0
	ガスを止められ給食配給を受ける	11	さびしい(3)	13	12	0	1
精神活動喪失	生きる楽しみがない	8	楽しくない(3)	14	10	2	2
	物忘れで同じ言葉を繰り返す	13	恥ずかしい(3)	17	13	1	3
入所	配偶者死亡で老人ホーム入所	28	ショック(6)	19	18	0	1
	肺炎で老人病院入院	16	生きる望み喪失(4)	13	8	1	4

＊回答数は複数回答

『生活行動の依存』の「寝たきりでヘルパーに来てもらう」は、すべてが老年者をイメージしており、その内容をみると＜他人との交流ができずさびしいだろう・人生８割を失った思い＞等、老年者のさびしさをイメージしているものもあった。また、＜こんな状態で生きたくも死にたくもない・気が狂ってしまうかもしれない＞等のように悲観的なイメージと、＜ヘルパーが来るのが楽しみで少し救われた・自分をしっかり持っていられたならばこんな幸せなことはない＞等のような受容的なイメージもあった。「ガスを止められ給食配給を受ける」「ガスが扱えず家が全焼」の両者とも、その大半が老年者をイメージしていた。

『精神的活動の喪失』は、ほとんどが老年者をイメージしており、その内容を見ると「物忘れで同じことを繰り返す」では、＜周りから同情や哀れみの目でみられたくない・当たり前の普通の生活が奪われてしまう・人間の価値が下がった感じ＞等の回答があった。また「物忘れ」を痴呆と混同していたり、強い恐怖感と結びつけて考えている学生もいた。

「生きる楽しみなし」では、＜このままあと５年生きるのが嫌・自殺するかもしれない・放っておいたら痴呆になってしまうだろう・生きることに消極的になり後を向いてしまいそう＞等、人生を悲観した内容のイメージであった。反面、＜できるだけ楽しみは持っていたい＞や＜今生きている老人に何かしてあげたい・心の支えが必要・個別性のある看護をしたい＞等のように看護援助まで考えている者もあった。

以上のように、『老人病院・ホームの入所』の実感は、深い悲しみや絶望であった。特に「配偶者死亡し老人ホーム入所」では実感・イメージとも最も多く、夫を失ったショックは非常に大きかったと同時に、ホームでの生活にこれからを託すなど、将来の方向性にまで考えているものもあった。『生活行動の依存』は、他項目に比べ老年期の喪失の実感・イメージとも多く、「ガスを止められ給食配給」「家が全焼し持ち物カードを失う」の両者は、物を失うことで老年者のつらさをイメージしていた。

『精神活動を喪失』の実感は悲観的なものが多く「物忘れ」では、大半が痴呆に関するイメージを持っていた。痴呆との混同から、実感共に悲観的であり、恐怖感と結びつけている者もいた。「生きる楽しみなし」では、実感・イメージとも否定的であったが、看護援助まで考えているものもあった。

Ⅶ　考察

出来事カードの体験の違いにより、学生の老年者理解に相違があったのかを分析した結果、いくつかの特徴があった。

(1)　自立できている身体障害のシミュレーション

『身体的苦痛とは、身体のある部位に位置する不快な感覚である。』[4]今回学生達は、腰を曲げたり、足や腰に砂嚢をつけたり、包帯を巻いて歩くことで痛みを感じるとは、予測していなかったことだと思う。このことは『情報を得られない痛みの体験は、痛みの刺激の強さが過大に評価され易い。』[5]といわれるように、予想されなかった痛みが実感をより強めたのではないか。また、砂嚢や包帯は、装着後暫らく経ってからじわじわと痛みや重苦しさとして発現してきて、それが老年者の日常生活の動きを鈍くし、行動範囲を狭めざるを得ない老年者の辛さにまで考えが至っていると思われる。

また、『身体的不自由』の軍手をしてファースナーを上げたり、両頬に綿球を入れマスクをして話すことは、体験して初めてもどかしさや不自由さが感じられたことであったため、老年者がいかに不自由な生活を強いられているかをイメージすることが出来やすかったのではないかと考える。

上記『身体的苦痛』『身体的不自由』の内容は、ほんの小さな身体的障害であっただけに、予想を越えた、ずっしりとした手応えのある体

験になっている。

同じ『身体的不自由』でも視力低下をサングラスで体験することでの、老年者イメージは乏しかった。これは、＜一番嫌いなこと・車の運転が出来ない・新聞のスクラップができない＞等、今の自分に強く焦点が当たったため、客観的な老年者イメージまで考えられなかったのではないだろうか。

『身体の外観が不快』は、身体的な苦痛や生活の不自由さと異なり、外側から見た不快であるため、上記と同じく今の自分に焦点が当たり、＜恥ずかしい＞と言う思いは強いが、自己の内面に向けた思考にまで至らず、従って老年者へのイメージ化が出来にくかったと思われる。

(2)　自立した生活の中に起こる心理・社会的出来事のシミュレーション

『老年者になって獲得する出来事』の「老人クラブの役員」「シルバーチケット」は、老年者の社会参加を応援するシステムである。また電車で席を譲ることも、老年者を保護する社会的なモラルである。応援する立場にある学生に、老年者に対する社会的恩恵を肯定的にとらえているものが多いことは納得できる。また老年者の生活と意識の調査によると、『老人クラブなどの老人グループ活動への参加は、積極的参加者と不参加者に二分されている。』[6]という。学生の体験を通しての回答も、＜うれしい、光栄＞など肯定的なものと、＜面倒＞など否定的なものとで二分されており、老年期の意識に影響を与えるのではないかとも考えられる。

次に、『年齢を感じさせられる』の「お婆さんと呼び止められた」や『老年者になって制限される』の「献血を断られた」「車の免許が更新されない」では、＜この年齢なら仕方ない＞と現在の自分の価値観で出来事をとらえている学生が多い。『若さへの執着・老いからの逃避・老いの受容の拒否という現象は、現代社会において一般的に見られる傾向である。』[7]といわれ、特に自立した生活を送っている高齢者の中には、「年寄り扱いされた」とショックを受ける人が多い。このことは、＜老いを受け入れていない人ならショックかもしれない＞と客観視してイメージした学生の回答にも現われている。しかし青年期の若い学生とって、老年者の本当の気持ちを実感し老いを受容していくには、まだ距離感がありすぎるのかもしれない。

老年期における友人は、モラールを維持し老いに適応していく上で重要な役目をしているとされている。老年者の意識調査においても、悩み事を相談できる相手は家族に次いで親しい友人であるという報告が得られている。老年者にとって、そのように大切な存在である友人を失ってしまうことは、深刻な出来事である。老年期ばかりでなく同世代の友人は大切な存在であり、20歳前後の学生の世代にとっても親から自立していく上で友人は重要な役割を果たしている。「仲良しの友人が死亡」では悲しい実感を回答したものが多いが、学生が現在の大切な友人を失ってしまうことを想像し、現在の自分の感情と老年者や老年期の自分とを重ね合わせたことで、そのつらさを実感できたからではないかと推察される。考えたことが一番少なかったのは、この感情が先行したため他に考えが及ばなかったものが多かったからではないだろうか。

(3)　自立できなくなるような身体障害のシミュレーション

『精神的苦痛』の「寝かせられ生活で紙オムツ」「左半身マヒで便器・尿器あてる」について考えてみる。この出来事カードは、老年者をイメージし看護を考えることができた。排泄は生理的欲求のなかでも人間の尊厳に関わることであり、その行為を他人に委ねるこの出来事により、＜恥ずかしい＞と実感できたことは、『排泄のために人の世話になることは苦痛である。』[8]と感じる老年者と同じ状況に遭遇し、老年者のイメージはより実像に近く描くことが出来たのではないだろうか。また失われる尊厳を取り戻すため、看護を考えることができたのではないかと思われる。

「便器・尿器」での体験では、「紙おむつ」のようにしばらく装着したままでいるのと違い、一時的にあててみることであったためか、恥ずかしさなど実感した回答をしている者は、「紙おむつ」より少なかった。イメージは、身体的活動性の低下してるときに持ちやすいものであることから考えると、その体験を、経験している時間の経過により実感や、思考に影響がみられたと考えられる。

同じ『精神的苦痛』の「老人性痴呆症でつなぎのパジャマ」は、多くを実感出来ていたにもかかわらず、老年者のイメージに結びつかなかった。イメージはその人の持っている知識や体験により描くことが出来るものである。学生は老人性痴呆症に対する知識もあいまいであり、老年者イメージを描く事が困難であったのではないだろうか。

次に『身体的苦痛』の「右半身マヒで杖歩行」「糖尿病性壊死で片足歩行」について考える。共に＜辛い＞実感をし老年者のイメージを得られた出来事である。＜こんなに辛いとは思わなかった＞と学生が表現するように、自立のできる身体障害での『身体的苦痛』体験同様、予想されなかった辛さにより実感が強められたと考える。そのため、自分の辛さを老年者に置き換えて考えることが出来たのではないだろうか。

『身体的不自由』の「左大腿骨頚部骨折で車椅子」「リウマチで肘をまげての着衣」は『身体的苦痛』に等しく実感し、老年者イメージを得られた出来事である。簡単な行為であるにもかかわらずなかなかうまく出来なかったことが、老年者への考えに及んだのではないかと考える。「車椅子」では実感した回答が少ないにもかかわらず、老年者イメージ、看護ケア、社会への提案まで回答のあった出来事である。『イメージは、人間が理解し保持している知識による』[9]ものとすると、近年少ないながらも車椅子を使用しての外出姿も見受けられることがあるが、こういったことが影響しているのではないだろうか。「車椅子」での体験は実感するような出来事ではなかったが、学生の持っている知識の中で考えることが出来たのであろう。

(4) 自立できなくなるような心理・社会的出来事のシミュレーション

『生活行動の依存』は、実感したこと・老年者をイメージしたこととも多かった。その内「家が全焼し持ち物カードを失う」生きがいを含めた喪失のイメージが強かった。これは、家が全焼したことにより、長い人生の中で苦労し、築き上げてきた所有の財産や思い出のすべてを失うことである。「ガスを止められ給食配給」は、生活の基本となる食生活を他人に委ねることである。これら物的な損失により、どちらも生きがいや役割の喪失につながっている。青年期は、ライフサイクルにおける新しい獲得の時期である。その時期の学生が、シミュレーションで失うという体験をすることは、非常に強い実感として感じられ、老年期の喪失をイメージさせたのではないだろうか。また「寝たきりでヘルパーに来てもらう」では、全回答が老年者をイメージしていた。ヘルパーに身の回りの世話を委ねることに対し学生は、受容・悲観の両イメージをもっていた。受容的にイメージできたのは、わが国も高齢社会を迎え、福祉面での情報を得る機会が増え、学生がヘルパーについての認識を持ち始めたからではないだろうか。『精神的活動喪失』の「生きる楽しみなし」「物忘れ」の2出来事は、実感・イメージとも悲観的なものが多かった。このことから、身体的障害は自分の身体の感覚を通して感じることであったため、学生にとって具体的に実感しやすい出来事であり、シミュレーションとしては効果的であった。

以上のことから、心理・社会的な出来事は、実際に自分の身体を使った体験ではなかったが、老化や心理について既習の知識のあったものについては老年者をイメージできたと考えられる。また、自立できなくなるような生活の体験では、痴呆の項目に悲観的な回答が集中していた。学

生は痴呆についてまだ学習していないため、ボケと痴呆を混同し誤った理解をしているものが多いと思われる。特に、知識が正確でないものに悲観的印象を強く受け、否定的にとらえやすいと言われる。池田らは『老年者の理解の第一歩は、肯定的なイメージから入ることが望ましい』[10]と述べているように老人看護学の初期段階で導入した老年者のシミュレーションにおいては、否定的なイメージばかりでなく肯定的なイメージが持てるように十分に考慮する必要がある。『老年者になって獲得する出来事』は、肯定的なイメージを持てた貴重な体験であり、今後このような出来事カードを増やすよう検討していく必要がある。

Ⅷ　結論

本研究において以下のことが明らかとなった。

1，自立できている身体障害での体験では、『身体的苦痛』『身体的不自由』『外観の不快』の出来事は、三者とも実感したことに差はなかった。体験から考えたことでは『身体的苦痛』が老年者をイメージする回答が最も多く、「顔にしみ」などの『外観の不快』は恥ずかしい実感は多かったが、老年者をイメージするまでに至っていないものが多い。

2，自立した生活の中で起きた心理・社会的出来事に遭遇して、『年齢を感じる』の「仲良しの友人が死亡」は実感したことは最も多かったがイメージしたことは最も少なかった。『老年者になって獲得する』の「電車で席を譲ってくれた」は、老年者を最も多くイメージしており、肯定的な回答が多くみられた。

3，自立できなくなるような身体障害に遭遇して、『精神的苦痛』の排泄に関する出来事は、他項目に比べ実感も老人イメージも多く看護ケアまで考えられた。「老人性痴呆症でつなぎ服」では実感は多かったが老年者をイメージするまでには至らなかった。また『身体的苦痛』も『身体的不自由』も共に老年者をイメージできていた。

4，自立できなくなるような生活の中で起きた心理・社会的出来事に遭遇して、『生活行動の依存』の「家が全焼し持ち物カードを失う」等、物を損失することから老年者の生きがいや役割の喪失感をイメージできていた。『精神活動喪失』の「物忘れ」では、実感・イメージとも悲観的であった。また『老人病院・老人ホーム入所』では実感・イメージとも最も多く、ショックは非常に大きかった。

Ⅸ　おわりに

アメリカで開発された“INTO AGING”をもとに、今回老年者を理解するための一助としてシミュレーションゲームを取り入れた。試行錯誤しながら、本学の学生に合わせてカード内容を検討し実施したが、殆どのカードで老年者をイメージできており、今回の体験は、老年者の理解につながる有意義な学習方法であった。

個人差はあるだろうが、出来事カードの組み合わせ方によっても実感やイメージに違いがあるのではないかと考える。したがって今後は個々の学生の体験を縦断的に分析し、さらに充実したシミュレーションのあり方を検討していきたい。

引用文献

1）早坂泰次郎，人間関係の心理学，講談社現代新書，P96，1993
2）高崎絹子，看護援助の現象学，医学書院，P15，1993
3）高崎絹子，前掲書，P25
4）中西睦子，痛みをもつ患者の看護，医学書院，P21，1986
5）中西睦子，前掲書，P76
6）総務庁長官官房老人対策室編，老人の生活と意識，中央法規，P31，1992
7）南弘文，老いることの意味，金子書房，P155，1995
8）鎌田ケイ子，老人看護論，全国老人ケア研究会，P106，1995

9）水島恵一，人間性心理学大系第9巻イメージ心理学，大日本図書，P38，1988
10）池田敏子他，老人に対するイメージとその形成に影響する因子（第二報），第22回日本看護学会（看護教育），P90－92，1991

参考文献

1）Hoffman. T. L Reif. S. D. Into Aging. Slack，1984
2）多田富雄他，老いの様式その現代的省察，誠信書房，1994
3）森幹郎，老いとは何か老い観の再発見，ミネルヴァ書房，1989
4）長谷川一夫他，老年期の精神障害，新興医学出版，1995
5）竹内隆仁，医療は生活に出会えるか，医歯薬出版，1995
6）ポール・トウルニエ，山村嘉巳訳，ヨルダン社，1994
7）前田清子，痛みの記録，日本看護協会出版会，1990
8）三好春樹，老いの見方感じ方，筒井書房，1994
9）中島紀恵子他，老人看護学，真興交易医書出版，1992
10）日野原重明編，老人患者のクオリティ・オブ・ライフ，中央法規，1995
11）中山茂他，老年心理学，診断と治療社，1990
12）井上勝也他，新版老年心理学，朝倉書店，1994
13）佐藤弘美他，「老年期を生きる」を理解する授業の展開，看護教育，37(4)，P280－284，1996
14）佐藤弘美他，老年期を生きることの理解を深めるためのシュミレーションゲームの評価，日本看護教育学会誌，15(2)，P112－113，1995
15）宮地緑他，老人看護学演習における老いの体験学習，看護教育34(11)，P865－870，1993
16）鳴海喜代子他，看護学生の老人観に関する研究第3報，千葉大学紀要，10，P13－24，1988
17）鳴海喜代子他，看護学生の老人観に関する研究第4報，千葉大学紀要，12，P11－19，1990
18）鳴海喜代子他，看護学生の老人観に関する研究，帝京平成短期大学紀要，創刊号，P101－110，1991
19）中野悦子，高齢者と看護学生の老人イメージの特性，第25回日本看護学会老人看護，P99－101，1994
20）中川米造，医学教育における体験学習，月刊ナーシング，11(4)，P57，1991
21）佐々木正人，認識科学選書15からだ：認識の原点，東京大学出版，1994
22）西村かほる，失禁のケア，中央法規，1995
23）藤岡完治編，感性を育てる看護教育とニューカウンセリング，医学書院，1992
24）見藤隆子，人を育てる看護教育，医学書院，1993
25）A.H. マスロー，上田吉一訳，完全なる人間，誠信書房，1993
26）M. メルロー．ポンティ，竹内芳郎他訳，知覚の現象学，みすず書房，1993
27）Mary.A.Matteson 他，小野寺杜紀他訳，看護診断に基づく老人看護学2，医学書院，1993
28）Mary. A. Matteson 他，小野寺杜紀他訳，看護診断に基づく老人看護学3，医学書院，1993
29）Mary. A. Matteson 他，小野寺杜紀他訳，看護診断に基づく老人看護学4，医学書院，1993
30）折茂肇他，新老年学，東京大学出版会，1996